



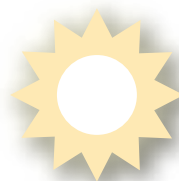
JCRS

*Japanese Coral Reef
Society*

日本サンゴ礁学会ニュースレター

Newsletter of Japanese
Coral Reef Society

2001 Vol. 9/10



日本サンゴ礁学会第4回大会のご案内

第10回国際サンゴ礁シンポジウム沖縄誘致成功

日本サンゴ礁学会評議員会議事録



contents

目次

会告欄：日本サンゴ礁学会 第4回大会ご案内	p.2
若手会員の眼 - 6 -	p.2
日本サンゴ礁学会 1999/2000 年度 総会議事録	p.3
日本サンゴ礁学会評議員会議事録	p.3
2004 年第 10 回国際サンゴ礁 シンポジウム沖縄誘致成功のお知らせ	p.5
2001-2003 年度評議員選挙結果報告	p.9
日本サンゴ礁学会新旧評議員会議事録	p.9
日本サンゴ礁学会第4回大会のご案内	p.11
お知らせ	p.12



日本サンゴ礁学会第4回大会 の開催について

日本サンゴ礁学会第4回大会(2001/2002年度大会)を沖縄・琉球大学を主会場として下記の要領で開催します。みなさまの参加と協力をよろしくお願いいたします。

大会実行委員長 松田 伸也

- 期日：2001年11月2日(金)～11月4日(日)
- 会場：琉球大学千原キャンパス 他
- スケジュール
- 11月2日(金)
 - 10:00～12:00 日本サンゴ礁学会総会
 - 13:00～17:20 一般発表
- 11月3日(土)
 - 9:30～12:30 一般発表
 - 14:00～16:30 公開シンポジウム
 - 18:00～20:00 懇親会
- 11月4日(日)
 - 9:30～12:10 一般発表
 - 13:20～17:00 一般発表

参加・発表申込要領など、詳細については、
本ニュースレター11ページをご覧ください。

日本サンゴ礁学会誌【Galaxea no. 2】 の発行について

日本サンゴ礁学会誌【Galaxea no. 2】が、2000年12月に発行されました。本号は、7編の原著論文が掲載されています。内容はホームページをご覧ください。

なお、すでに会員にはお届けしていますが、追加のご希望や図書館でのご購入等の場合は学会事務局にお問い合わせください。頒布価格は 4,000円です。是非できるだけ多くのところに頒布できればと願っております。

若手会員の眼 - 6 -

みなさん、こんにちは。今回の若手会員の眼は静岡大学の博士過程2年、鈴木 款(よしみ)研究室の黒沢が担当です。

どの研究室でもサンゴ礁の研究にはチームを組んで全員一丸となって観測に臨むと思うのですが、大学の人間だけで行うことはできません。必ず地元の人達の協力が必要です。採水を行う際には漁師さんに船(サバニ)を出して頂きますし、観測機器の設置には現地の環境アセスメント会社のダイバーさんに協力をお願いします。観測を行いたい海域の危険については地元の漁協の方に相談にのって頂きますし、測定で宿の食事の時間に帰れない場合にはお弁当を作って頂くこともあります。まさに研究観測と地元の方々の協力は切っても切れない関係にあります。

数年前、宮古島で地元漁師の方が回遊してきたサメに食い殺されてしまうという、残念な事件が起こったことがありました。我々のグループはまさに宮古島で観測を行っている最中でした。口にこそ出さなかったが、やれやれとんでもない事件が起こったものだ。これは下手をすれば今回の観測はただでは済まないかもしれないぞ、と各々が互いに不安な顔を見合わせ、もやもやとした暗い雰囲気

がグループ全体を包み込んでしまいました。

翌日の朝、桟橋の前に定刻通り集まった我々の前に、船長さんが水中銃を携えて現れました。そしてぽかんとした我々に向かって一言。「サメが出たら、(水中銃で)打ち殺してやっから。」

我々は船の上で水中銃を構えた船長さんに見守られながら、いつも通りの採水と試料採取を行うことができたのでした。船長さんの勇姿が我々の不安を吹き飛ばしてくれたのはいうまでもありません。

このように地元の方々の協力を得て、我々の研究グループは宮古島の保良湾サンゴ礁で9年間研究観測を行っています。彼等の協力無しには学会発表も研究報告も論文投稿もできませんでした。観測結果によって得られたデータや報告書などの研究業績も大きな財産ですが、こうした人と人とのつながり、人脈といったものもなかなか手に入ることができない、貴重な財産であると思います。我々の研究成果が国に、地元の方々に、サンゴ礁という自然にしっかりと還元ができる道が開かれれば、本望であると考えて今日この頃です。

最後になりましたが、本研究室では意欲のある若手学生を随時募集していますので、研究内容に興味をもたれてくれる方、またもっと詳しく知りたい方はお気軽にお問い合わせください。

日本サンゴ礁学会 1999/2000年度 総会議事録

日時：2000年9月22日（金）午前10：00～11：00

場所：慶應義塾大学三田北新館ホール

議長：中森亨・松田伸也・藤原秀一

< 議事録 >

1. 会長挨拶

山里清会長より第3回大会の開会の辞が述べられた。

2. 議長団選出

事務局より第3回大会総会の議長として中森亨・松田伸也・藤原秀一の3氏が推薦され、承認された。

3. 報告事項

(1) 事務局

平成12年9月12日時点での学会会員数は338名であることが報告された。1999-2000年度の収入は4,147,811円で、支出は2,106,374円であり、会計は黒字であることが説明された。評議員改選のための名簿が作成中であることが報告された。

(2) 会計監査

厳正な審査の結果、1999-2000年度の決算報告に遺漏が無いことが報告された。

(3) 企画委員会

サンゴ礁学会設立記念出版物『日本におけるサンゴ礁研究』の出版を予定していたが、できなかったことが報告された。今年の12月までに出版する旨が説明された。第10回国際サンゴ

礁シンポジウムの誘致活動を行うためのサイエンスプランと企画書を作成したことが報告された。

(4) 学会誌編集委員会

日本サンゴ礁学会誌no.2が今年度出版されることが報告された。

(5) 広報委員会

1999-2000年度は、ニュースレター8号を発行したことが報告された。また、11月に9号を作成する旨が説明された。

(6) 選挙委員会

現評議員の任期満了に伴い評議員の改選が2001年3月に行われることが報告された。

(7) 白化現象小委員会

これまでの活動を総括し、新たな活動計画を作成する予定であることが説明された。

(8) 日本サンゴ礁学会第3回大会実行委員会

大会委員長より大会の日程が紹介された。9月23日に公開シンポジウム『私たちをめぐるサンゴ礁—社会、経済、文化』の概要が説明された。

4. 総会の成立

総会の出席者が33名で委任状が41名分あることから、総会の成立に必要な数（64名）を上回ったことが議長より報告された。

5. 審議事項

(1) 事務局

2000-2001年度の予算案が諮られ、承認された。

(2) 第4回大会

第4回大会実行委員長（松田伸也氏）より次年度の大会を沖縄で開催することが報告された。

日本サンゴ礁学会 評議員会議事録

日時：2000年9月21日（木）15:00-16:40

場所：慶應義塾大学三田キャンパス図書館（旧館）

2階小会議室

出席評議員：山里、近森、大森（信）、茅根、河名、菅、工藤、小西、下池、立田、土屋、中井、中野、中森、野崎、林原、日高、藤原、松田、山野、横地

（以上21名）

委任状：秋道、長谷川、大森（保）、目崎

オブザーバー：堺、保坂

事務局庶務：波利井、田中

1. 各委員会報告

1) 事務局

1999-2000年度会計報告、会員動向9月12日現在の会員数は338名。現状、会費の入金率は良好。学生会員資格の確認を2年に1度行う。

2) 企画

国際サンゴ礁学会誘致のためのサイエンスプランを策定。「日本のサンゴ礁研究」の出版は、今年度中を目処とする。

3) 学会誌編集

依頼原稿2報（1999年公開シンポジウム招待講演者）の他に既に3報は受理、3報が査読中。11月中には学会誌を会員に向け発送の予定。

4) 広報

現在ニュースレター（以下N.L.）は8号まで郵送済み。ホームページは、順調に運営中。掲載して欲しい情報があれば、JCRS-hp@sys.eps.s.u-tokyo.ac.jpに連絡する。第3回大会のパネルディスカッションは、N.L.に掲載する。N.L.9号は2000年11月、10号は2001年2月発送予定。

5) 選挙

現在の評議員の任期は2001年6月末まで。2001年2/9公示、～2/23立候補・推薦受付、3/2-3/13投票、3/20開票。

2000年12月末までの会員登録をもとに、事務局が名簿を作成する。この名簿をもとに、被選挙権を認める（N.L.9号で周知）。N.L.10号とともに選挙公示・会員名簿を発送する。

6) 白化

保全に配慮しながら、研究をまとめる段階にある。少なくとも白化委として何らかのまとめを行うまでは継続する。

7) 2000 年大会

9 月 23 日は、公開シンポジウムを一般に公開したいという観点から、参加費を無料にすることを評議員で承認。会場費は、慶応義塾大学の支援により無料。

ポスター発表の優秀者には賞を授与し、評議員が審査にあたる。ポスター発表が公開になったことを総会で報告する。

特別セッションの内容は、誘致委で議論。

8) 2001 年大会は、琉球大学で開催。委員長は松田。

9) 国際サンゴ礁シンポジウム誘致委員会については、評議員会後開かれた同委員会において、報告・議論が行われた。

2. 総会

1) 議事進行は、以下の様にする

会長挨拶

議長団選任

報告事項(事務局(会員動向・会計報告)・会計監査報告・企画・学会誌編集・広報・選挙・白化・大会準備・国際サンゴ礁シンポジウム誘致)

審議事項(2000-2001 年度予算案、2001 年大会)

3) 議長団は中森・松田・藤原とする。

日本サンゴ礁学会会計報告

日本サンゴ礁学会 1999 年 2000 年度(1999 年 7 月 1 日～2000 年 6 月 30 日)収支は表 1 の通りである。「日本のサンゴ礁」印刷費が、ほぼ次年度に繰り越した形になっている。これに基づいて作成した 2000 年-2001 年度(2000 年 7 月 1 日～2001 年 6 月 30 日)予算案は表 2 の通りである。

事務局 茅根 創

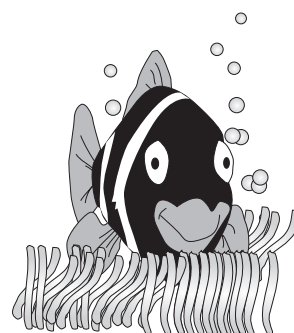


表 1. 日本サンゴ礁学会 1999 年-2000 年度(1999 年 7 月 1 日～2000 年 6 月 30 日) 会計報告(日本サンゴ礁学会事務局)

2000 年 6 月 30 日現在 単位: 円

収入の部

前年度繰越金	786,493	(内訳)	
		学会事務センター預り金	724,613
		学会銀行預金	61,880
会員会費	2,117,075		
ニュースレター広告費	150,000		
学会誌広告料	50,000		
学会誌販売代金	44,000		
「日本のサンゴ礁」印刷費	1,000,000		
利息	243		
収入合計	4,147,811		

支出の部

業務委託費	721,621	(内訳)	
前受金(本年度会費繰り込み)	28,000		
ニュースレター作成費	509,670	ニュースレター 4 号	155,400
		ニュースレター 5 号	122,955
		ニュースレター 6 号	155,400
		ニュースレター 7 号	75,915
学会誌印刷費	525,420		
ロゴマークデザイン料	100,420		
評議員旅費	212,649		
学会大会コピー代金	6,494		
通信費	2,100		
支出合計	2,106,374		

残高	2,041,437	(内訳)	
		学会銀行預金	1,649,370
		学会事務センター預り金	392,067

表 2. 日本サンゴ礁学会 2000-2001 年度予算案 (2000 年 7 月 1 日～2001 年 6 月 30 日)

単位: 円

収 入

前年度繰り越し	2,041,437
会員会費	2,200,000
広告収入	200,000
収入合計	4,441,437

支 出

業務委託費	730,000
学会誌印刷費	600,000
ニュースレター印刷費	600,000
「日本のサンゴ礁」印刷費	1,000,000
評議員旅費	220,000
コピー代金	300,000
通信費・雑費	50,000
支出合計	3,500,000

翌年度繰り越し 941,437



OKINAWA

サンゴ礁をまもろう！ 子供と地球のために・・・

2004年10回 国際サンゴ礁シンポジウム 沖縄誘致成功のお知らせ

JCRS
Japanese Coral Reef Society
日本サンゴ礁学会

第10回国際サンゴ礁シンポジウム(2004年) 日本(沖縄)誘致成功までの経緯

土屋 誠 (組織委員会委員長, 琉球大・理)

第10回国際サンゴ礁シンポジウムの日本(沖縄)開催が決定しました。第10回という記念すべき大会の誘致に成功したことを皆様と一緒に喜びたいと思います。同時に責任の重大さを感じております。サンゴ礁研究の発展と美しいサンゴ礁の保全に大きな貢献が出来るよう努力しましょう。

国際サンゴ礁シンポジウムを日本に誘致しようという話題は以前からあり、また外国の著名な研究者からも日本、沖縄を開催地として推薦するという話を直接、間接に聞いていました。しかしながらさまざまな理由でそれは実現しませんでした。

今回の誘致活動の直接的な引き金になったのは、前々回のパナマ大会(1996年)の直前に行われた「第9回大会を日本に誘致しよう」という議論でした。パナマでの立候補には間に合いませんでしたが、これがきっかけになり1997年日本サンゴ礁学会が創立され、日本におけるサンゴ礁研究、サンゴ礁の保全活動の大きなまとまり、誘致のための母体が出来ました。次の年(1998年)には世界的規模で白化現象が起こり、国内でもサンゴ礁に対する関心が益々高いものになる中で次回大会の誘致のための話し合いがもたれ、運営の可能性、開催の意義、大変さ、等を十分に議論した結果、誘致しようという判断が下されたのです。私たちは、誘致のための活動は広くサンゴ礁に関心のある方々に参加していただけるようなものにすべきと考えていました。これは今後の活動についても同様です。

その後、数回の集まりを持ち、かつ国際サンゴ礁学会の会長はじめ担当者と緊密な連絡を保ちながら準備が進められてきました。日本サンゴ礁学会では、国際サンゴ礁シンポジウムの誘致は学会の総意であるという認識から、山里会長以下評議員・庶務全員(注)が誘致委員会委員という、文字通り総動員態勢で誘致に臨むことを評議員会で可決し、実際に総動員体制で誘致にあたりました(以下の文章では、主に評議員以外の方で誘致に関わられた方のお名前だけあげました)。

次回の開催地は2000年10月にバリで開催される第9回大会において決定されます。バリの大会では開催地決定のための審査委員会が10月22日(開会式の前日)の夜に予定されており、

立候補する国はそこで誘致のための演説をすることがわかりました。立候補に関する書類の提出、その後の追加資料の提出要求、などに迅速に対応するため誘致委員が徹夜で作業にあたりました。サイエンスプランと資料の作成には誘致委員のほか、灘岡さん、若木さん、高木さんが献身的に支援してくれました。海外との渉外には鈴木さんが努力されました。国際サンゴ礁学会の会長である Terry Done 博士を2000年の慶応大学で開かれた大会に招聘したのですが、これには大会委員会(近森委員長)が尽力されました。誘致活動を盛り上げるとともに、誘致のための資金を集めるために、Tシャツを作り販売することになり、これには堺さんが尽力してくれました。沖縄での受け入れについて、沖縄の評議員のほか、大勢の方が議論に参加してくれました。コンピュータープレゼンテーションのための美しい画面が作成されたのがバリへ出発する3日前、次の日に大急ぎで作った原稿を Woesik さんが磨き上げてくれました。

大変悩んだのは審査委員会で誘致のためのプレゼンテーションをする日本チームのメンバーの選定でした。多くの方々が情報の収集と資料の作成に分担して関わってこられたので、可能であれば10名程度でチームを編成したいと希望していましたが、5名以内という枠は厳格なものでしたので、悩んだ末に、山里、茅根、中森、Woesik、土屋の5名を決定しました。考慮した点は、プラン作成に対する貢献度、審査員とのつながり、次期国際サンゴ礁学会評議員、沖縄と沖縄以外のメンバーの比、などです。誘致活動を積極的に進めるために飛行機の便を変更してまで早くバリに入られる方も多くいました。その方々はプレゼンテーションに参加出来ませんでしたが、宣伝用デスクの確保、ポスターパネルの準備、その他の情報収集に活躍されました。会場に到着して驚いたことは立候補国の1つであるパナマが会場入り口に大きな宣伝用ブースを設置し、すでに活動を開始していたことです。鈴木さんたちのお骨折りで小さなデスクを借りて宣伝を始めたのですが、その規模は明らかに小さく、「やばい」と感じたのは私だけではなかったでしょう。

委員会での私は役割は立候補の理由を紹介することでした。本来ならば原稿を全て記憶して望むべきだったのですが、時間と能力のなさで読み上げるしかありません。原稿が制限時間をオーバーしそうな分量であったこともあって私の緊張度は沖縄を出発するあたりから相当なものでした。最終審査に残った立候補国3カ国(パナマ、キュラソー、日本)のうち、日本の割

り当て時間は3番目の午後9時30分から。プレゼンテーションは20分、その後インタビューを受ける形で質疑応答の時間がありました。直前のキュレーターが予定時間をかなり過ぎても出てこなかったでカーテンの隙間から垣間見ると「とても真剣に議論している」「しばられている」という雰囲気。小心者の私は益々緊張してしまいました。

覚悟を決めて原稿読み開始。中森さんがコンピューターを操作して原稿に合う画面を出してくれています。時折うなずき、またメモを取ったりしている審査員の顔が見えたのはクソ度胸がついたのか、それとも余裕が出てきたのでしょうか？開催するからにはその国が責任を持って全体の運営に関わって欲しいとの連絡を事前に受けていましたので「私たちにはその能力が十分にある」事を意識的に2回繰り返して強調しました。その後各委員からの質問を受けましたが、それほど難問はなかったような気がします。「開催地は、例えば太平洋と大西洋を交互にするというように近隣の地で連続して開催しないほうが良いという意見もあるがバリの次に何故日本なのか？」という質問が最後にありました。プレゼンテーションの中で触れてはいたのですが「現在議論すべき最も重要な課題の1つは『人間と自然の共存』である。100万人以上の人間が住んでおり、大都市を有し、かつ美しいサンゴ礁がその周辺に残っている沖縄はその最適地である」と答えると、委員長から「そこへのエクスカースションも興味深いが、考えているでしょうね」と肩入れしてくれているようなコメントがあり、好意的な感じで聞いてもらえたと感じています。質疑が終了した後、山里会長が本シンポジウムを日本に誘致することは長年の悲願であると強く訴えて退室、皆で労をねぎらい合った後、ホテルに戻ったのは12時をかなり過ぎていました。

翌朝、会場に行くと国際サンゴ礁学会会長のDoneさんが寄ってきて「突然で申し訳ないが集まってくれないか」と3カ国のメンバーが集められました。指示された部屋で審査委員長のPichonさんから「各国から非常に内容があるプランを聞かせてもらい、選考は非常に大変であったが、サイエンスプラン、若い世代などに対する配慮、エクスカースションの面白さ、組織などを総合的に審査した結果、次期開催地として日本を選んだ」と報告を受けました。審査委員だけでなく、他の国の人たちにも祝福されていると嬉しさに混ざって、大変なことを引き受けてしまった、という気持ちが湧きあがってきました。

早速その夜、日本からの参加者に誘致の成功を報告をし、「やるからには楽しんでやりましょう」とビールで乾杯しながら新たな決心をすると同時に、バリ大会を運営した主要人物の方々にお会いし、運営のノウハウをお聞きするなど情報収集も開始しました。

今後長いような短いような4年間を過ごすことになります。単にシンポジウムの運営を成功させることを考えるだけでなく、この準備期間における日本におけるサンゴ礁研究の推進、プレシンポジウムなどの開催、等に積極的に努力し、終了後にもさらに同様の活動を通してシンポジウム開催の意義をさらに発展させたいものです。

注) 日本サンゴ礁学会評議員会・庶務(誘致委員会委員)は以下の方々です。

山里 清、近森 正、大森 保、大森 信、茅根 創、河名俊男、菅 浩伸、工藤君明、小西健二、下池和幸、立田 稔、土屋 誠、中井達郎、中野義勝、中森 亨、西平守孝、野崎 健、林原 毅、日高道雄、藤原秀一、堀 信行、松田伸也、目崎茂和、山野博哉、横地洋之、波利井佐紀、森本真紀、田中義幸。

国際サンゴ礁シンポジウムの開催地

開催年	開催地	開催国
第1回 1969	マンダバン	インド
第2回 1974	プリズベン	オーストラリア
第3回 1977	マイアミ	アメリカ
第4回 1981	マニラ	フィリピン
第5回 1985	タヒチ	フランス領フレンチポリネシア
第6回 1988	タウンズビル	オーストラリア
第7回 1992	グアム	アメリカ
第8回 1996	パナマシティ	パナマ
第9回 2000	バリ	インドネシア
第10回 2004	沖縄	日本

第10回国際サンゴ礁シンポジウム誘致活動に用いた資料は、学会のページから閲覧・ダウンロード可能です。

<http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs/ICRS/presentation.html>

また昨年インドネシアのバリでおこなわれた第9回国際サンゴ礁シンポジウムのページはこちらです。

<http://www.nova.edu/ocean/9icrs/>

第10回国際サンゴ礁シンポジウム (2004年)日本(沖縄)誘致成功までの経緯

土屋 誠(組織委員会委員長、琉球大・理)

第10回 国際サンゴ礁シンポジウム 組織委員会について

第10回国際サンゴ礁シンポジウムの沖縄開催が決定した後、バリで日本からの参加者が集まって会合を持ち、今後の進め方について議論を行った。その結果、バリでの開催の状況や問題点を調査し、日本での開催に役立てることを決め、インドネシアの組織委員会や実質的に科学プログラムの編成を行ったHopleyにインタビューを行った。さらに日本からの出席者から意見を求め、さらにインターネットを通じて世界のサンゴ礁研究者から意見を求めた。

帰国後、組織委員会を作ることを合意し、会長に山里 清、委員長に土屋 誠、事務局長に茅根 創がつき、現在、資金部門、科学プログラム部門、広報部門、会場部門の4部門で、準備作業を進めている。これまでに3回の組織委員会を開催した。以下では、その議事録を掲載する。

組織委員会は現在はオープンで、誰でも開催に加わりた方は参加できます。また組織委員会と日本サンゴ礁学会は独立とされ、学会員以外でも組織委員会に参加することができます。現在、組織委員会では年に2回のペースの委員会と、その間に各部門ごとの会合、さらにメールを通じた情報交換を行っています。組織委員会に参加したい方は、事務局の茅根 創までメールでご連絡下さい。

kayanne@eps.s.u-tokyo.ac.jp

第10回国際サンゴ礁学会 組織委員会第1回会合

沖縄

日時：2000年11月11日（土）19時～20時45分
出席者：土屋、山里、西平、日高、中野、松田、横地、
新垣、中谷、Woesik、藤原、茅根
オブザーバー参加：Kinzie, Heyward

1. 委員会の位置づけと体制

1) 10ICRS の準備・運営は、日本サンゴ礁学会とは独立した「第10回国際サンゴ礁シンポジウム組織委員会（10th International Coral Reef Symposium Organizing Committee）」が主催して行ない、日本サンゴ礁学会と主旨に賛同し開催に協力する学術機関、関係省庁等とが共催、支援企業等が後援するという体制で行なう。

2) 体制は、誘致の際の原案をたたき台として、広く自発的に参加してくれる方々で組織委を構成し、準備・運営にあたる。

3) 組織委の、会長 山里 清、委員長 土屋 誠、事務局 茅根 創。

4) サブコミティーは、会計、資金、科学プログラム、会場、登録、広報、HP、宿泊・トランスポーターション、同伴者プログラム、地元プログラム（公開プログラム）、途上国・スカラーシップ、情報技術検討など。サブコミティの構成と担当者は、今後2)に従って検討する。

5) 共催団体からも組織委に加わってもらうようにする。組織委の規約が必要ではないか。

2. まずやるべきこと

1) 基本的なシンポジウム像（科学プログラムと運営のフィロソフィー）についての議論と策定

2) 資金集め

3. 10ICRS について意見の紹介（1）～4）の集成した結果を別メールで流します）

1) Woesik が受け取った coral-list からのコメントを紹介セッションが多すぎる、1人で複数の発表は問題、ポスターを充実して、プロシーディングスはCDかインターネットで。

2) 茅根が受け取った国内参加者のコメントを紹介

・運営について：ウェブの充実と活用、主催者のしっかりした体制作り。

・科学プログラムについて：基本構成の議論の必要性、並行セッションが多いこと、ポスターの環境改善。

・その他：巡検の充実、同伴者プログラム、地元参加プログラム、周辺諸国との共催、パーティ・若手の会合等余裕あるスケジュール

3) 科学プログラム担当 Hopley のコメント

4) インドネシア側主催者へのインタビュー結果

4. その他

1) 現実的な問題点として、ホテルの宿泊費が高く会場から離れていること、食事をどうするか、情報技術を取り入れるとして会場がそれに対応しているかなどがあげられた。

宿泊について、JICA の研修センターを使えるのではないかと意見があった。

2) 台風の際の対応。バーチャルシンポジウムなどを準備しておいてはどうか。

3) 組織委と国際サンゴ礁学会（ISRS）の関係は、原則的には独立。情報と意見交換は密に行なう。科学プログラムの構成などでISRS が多大の支援をせざるを得なかったバリ大会は通常ではない（但し、シンポジウムが巨大になったため、ISRS の関与が必要との意見もある）。

4) 事務局は、当面の組織委の運営のためのもの。実際の国際サンゴ礁シンポジウム運営の事務局を個人で行なうことは不可能である。

5) 開催までの間に、準備のためのシンポジウム、ワークショップを開いてはどうか。

第10回国際サンゴ礁学会 組織委員会第2回会合

東京

日時：2001年3月6日（火）10-13時
場所：東京大学理学部5号館6階604室

出席者：山里、土屋、工藤、藤原、堺、鈴木（款）、灘岡、
若木、中井、大森（信）、広渡、姫野、茅根、
波利井、森本、梅沢

【決定事項と宿題】

1. 組織委を当面、プログラム、会場、資金、広報の4部門に分ける。4部門の上に、運営企画委をおく。

2. 実際の開催の際には、各部門はさらに以下のサブコミティーに分かれることになる。

・プログラム：科学プログラム、予稿集・プロシーディングス、地元公開プログラム、エクスカッション

・会場：会場、宿泊・トランスポーターション、同伴者プログラム

・資金：会計、資金、途上国・スカラーシップ

・広報：登録、広報、HP、情報技術検討

運営企画委は、4部門の中心メンバーと山里、土屋、茅根によって構成される。

3. 出席者の中で、各部門の担当をとりあえず以下のように割り振った。

・プログラム：鈴木、藤原、誘致委の科学プログラム担当者（中森ほか）、各分野について沖縄から担当者をあげる。

（構成としては、地質、生物、環境、人文・社会の4分野それぞれについて、沖縄・沖縄外双方から人がでていることが望ましい）

・会場：土屋が沖縄で適当な人にあたる。

・資金：工藤、堺、誘致委の会計担当（立田）

・広報：灘岡、学会広報（野崎、山野ほか）

上記に加えて、沖縄側と対応する誘致委や学会委員会の関係者が分担する。

4. 各部門で、関係者でメールによって以下の事項を議論し、次回組織委（5月）までにまとめる。

・プログラム：誘致プレゼンに基づいてシンポジウムのフィロソフィーを決める。セッション・プログラム構成の基本方（バリ学会で集めた意見を分析する）

・会場：会場とトランスポーターションの原案決定。

- ・資金：支援のめどと担当、予算計画、趣意書原案作成。
- ・広報：HP立ち上げ、参加者数の推計。

< 議事録 >

1. 誘致成功から組織委の立ち上げまで、これまでの経緯を説明後、山里会長と土屋委員長があいさつした。
2. 資金の支援の方針について質問があり、支援の内容について議論があった。
 - ・しっかりした金銭見積もりが必要。
 - ・体制が必要。法人格がないと公共団体からの支援は困難。
 - ・コンベンションビューローを使える。
 - ・場合によっては任意団体でも支援できる。
 - ・環境省、外務省、文部科学省、国土交通省。県、財団等、企業。
3. 今後の進め方について議論があった。
 - ・具体的な担当を、当面は大きく4つに分ける。
 - ・担当と検討事項を決め、次回(5月)に報告する。
4. 会場について。
 - ・6月は修学旅行が多く、ホテルおさえられてしまう。今年の夏までにホテルの仮押さえを業者がするくらいでないと。
 - ・船を横付けして会場件宿泊にしては。
 - ・会場は、会場部門で検討し、5月までに決める。
5. 趣意書が必要である。
 - ・科学プログラムの策定をまわっては遅い。プレゼンの内容をもとに、資金部門で作成をはじめる。
6. シンポジウムの性格
 - ・最近規模が大きくなり、お祭りのになっている。
 - ・並列セッションが多い、ポスター会場狭い、キャンセル、複数発表多かった、基調講演多いなど、これまで集めたコメントで共通する問題点は洗い出されている。
 - ・日本が主体になって、新しいシンポジウムを企画提案する。
7. シンポジウムのレベル、格がどの程度のものかわからないと、資金支援を頼みにくい(大臣がくる? 皇室が来る?)
8. 国内大会にあわせプレシンポジウムを行う。
 - ・シンポジウムで議論すべきことを国際的な研究動向とあわせポリッシュアップする。
 - ・国内での認知度、まだまだ低い。
 - ・一般・マスコミへの広報、資金を得るためにもプレシンが重要。
 - ・今年の大会での企画は大会委で議論している。
9. 国際対応。
 - ・組織委に在日外国研究者に参加してもらう(Woesik, Casareto, Steven)。
 - ・国際対応は、国際サンゴ礁学会経由で。
 - ・Reef Encounterへの投稿> 広報
10. 若手
 - ・まずは沖縄と沖縄外の学生の交流。
 - ・シンポジウムで若手の交流の機会作るべきとの意見多かった。
 - ・若手で提案、運営する。
11. その他
 - ・実施段階の予算書はいつできるのか。支援要請のためには必要。
 - ・参加者一人あたりの単価がいくらになるのかなど。
 - ・参加者の推計必要。
 - ・過去の地域別参加者数などの情報ないか。
 - ・何か新しい目玉が必要。
 - ・イベント会社を早く決める。
12. 次回組織委
 - ・サンゴ礁学会評議員会にあわせ、5月中に沖縄で。
 - ・それまでに、各部門で本日決まった担当者が中心になって、

部門の参加者を集め、議論する。

- ・各部門のミッションを決め、5月までにやるべきことを決めた> 重要決定事項参照。

国際サンゴ礁シンポジウム 組織委員会議事録

日時：2001年6月30日(土)15時10分-17時10分

場所：サザンプラザ海邦4階ゆうな・ひるぎ

出席者：新垣、大森 保、茅根、工藤、小西、堺、杉原、鈴木、立田、近森、中井、中森、仲谷、灘岡、波利井、松田、日高、山里、山野、Woesik、Casareto (+Yuki)

土屋委員長出張のため、茅根が議事進行。

1. 前回決定事項の確認

当面、科学プログラム、会場、資金、広報の4部門に分けて準備活動を進めること。

各部門で今日までに検討すべき内容の確認。

2. 各部門からの活動状況報告

1) 科学プログラム

中森：誘致提案の際の4つのテーマの説明。

鈴木：セッションが多いなどの問題が指摘されている。新しいプログラム構成を検討することが必要。

担当に、中森、鈴木、藤原、菅に加え、土屋、大森 保、茅根、Woesik、Casareto、日高、中野、近森、灘岡を加える。

2) 会場

山里：沖縄コンベンションビューローと沖縄県を土屋と訪問した。積極的に協力したいとの回答を得た。

新垣：会場を土屋を支援して、山城とともに担当したい。日程を決定する必要がある。

2004年6月28日(月)からの1週間を第1候補に決定。

3) 資金

工藤：趣意書を至急、作成する。

堺から民間のスポンサーとの関係について資料を用いた説明・提案があった。

他の資金とのかねあいも考慮して、資金部門で検討する。

わかりやすいテーマ、アピールする内容が必要。

大森 保を沖縄側の担当者とする。

4) 広報

灘岡：HP立ち上げの準備を進めるにあたり、サーバーを検討中。若木、波利井、山野、梅沢などの若手で立ち上げたい。登録は信用情報を扱うので、業者のサーバーなどに委託する。登録と一般への広報も、広報の検討事項。

一般への広報は、中井、藤原(資金部門とも関係)

----- 活動状況に対するコメント -----

相互に他部門の結果がでないことを束縛条件(進んでいないことの言い訳)にしていないか。長期的目標だけでなく、他部門の仕事に必要な暫定的な結果を示す必要がある。少なくとも、科学的テーマを一般にもわかりやすくブレイクダウンした「趣意書」を早急に作成する必要がある。

3. 開催までのスケジュール

茅根：土屋原案のメモ、茅根原案のアロー図に従って、開催ま

日本におけるサンゴ礁研究 1 の印刷会社に原稿を送った。
1 部ゲラができています。

3) 学会誌 (日高)

第 2 号を発刊した。第 3 号は受理 3 名、査読中 3 編、
不受理 2 編。
原稿は 8 月まで募集中。

4) 広報 (山野)

ニュースレター 8 号を 2000 年 8 月に出版した。
サンゴ礁学会の web を立ち上げた。サンゴ礁 Q & A をアップ
した。

ニュースレターが 2000 年 9 月以降、発行されていない点に
ついて事情の説明を求める質問があった。
新評議員会で対処することを決めた。

5) 選挙 (中野)

新評議員の選挙を行った。(工藤が後ほど以下を補足)
投票用紙の発表が遅れたが、有権者数 314 名のうち有効投票
数 91 だった。
投票は各分野 1 名と注記しているにもかかわらず、定数投票
しているものが多かった。
当選者辞退の規定が不明確。

2001-2003年 評議員会

日時：2001 年 6 月 30 日 (土) 13 時 20 分-15 時
場所：サザンプラザ海邦 4 階 ゆうな・ひるぎ
出席者：大森 保、茅根、工藤、小西、杉原、鈴木、立田、
近森、中井、中森、仲谷、灘岡、波利井、日高、
山里、山野
委任状：秋道、河名、菅、西平、林原、藤原
欠席者：大森 信、土屋、野崎、長谷川、松田
オブザーバー：中野

< 議事録 >

1. 評議員会成立の確認

評議員数 27、定足数 9 に対して、出席者 16、委任状 6 で、
評議員会が成立したことを確認した。

2. 会長・副会長の決定

新評議員会の会長として山里が推薦され、賛成多数で山里を
会長として決定した。
会長の指名により、副会長として小西を決定した。

3. 各委員会の委員長などの決定

- 1) 事務局 茅根が引き続き事務局長を行う。
- 2) 企画 中森が引き続き委員長を行い、日本のサンゴ礁研
究の出版の責をはたす。鈴木・杉原を委員として加える。
- 3) 広報
ニュースレターと HP は分けるべき。
ニュースレターが定常的に出版される体制を作る。会員サ
ービスの点から問題(会友はニュースレターだけ)。
編集を 2,3 名で回り持ちにしてはどうか。新しい広報委員
として波利井・杉原・中野を加える。
山野を委員長代行として野崎とも相談し、広報委員会の体
制を早急に検討する。
- 4) 学会誌編集委員会
第 3 号の編集が継続中だが、国際サンゴ礁委員会の委員長
など土屋へのロードが大きい。
日高が委員長に。
- 5) 選挙 灘岡が委員長に。

4. 活動方針

1) 事務局 (茅根)

これまで通り、学会事務センターとともに会員管理・会
計・学会運営のスケジュール管理を進める。

2) 企画 (中森)

日本のサンゴ礁研究 1、2 を出版する。

3) 広報 (山野)

体制について早急に検討する。
ニュースレターは年に 3 回は出したい。
HP 新着情報の更新とともに、英文・Q&A を充実させ
たい。

4) 学会誌編集 (日高)

前委員長から引き継いで行う。

5) 選挙 (灘岡)

前委員長から引き継いで行う。

5. 2001 年大会 (中野)

日程 11 月 2 日 ~ 4 日

2 日 公開シンポジウム

3 日 午前 総会、午後 ~ 一般講演

会場 琉球大学

9 月 20 日 申し込み締め切り、10 月中旬 要旨締め切り
7 月中にニュースレターで講演募集を行う。

6. 審議事項

1) 企画 (中森)

日本のサンゴ礁学会 1・2 号あわせて 130 万円かかる。
別途、送料が必要。
会員に配布した後、残部をどうするか。販売するか。
海中公園センターにきく
販売不可でも、会計に残があるので大丈夫。

2) 事務局 (茅根)

庶務を森本・渡邊にする。
ML を有料のプロバイダーに移転する。ログがとれるもの
がよい。
宛先不明メールは適当な時期に削除して、ニュースレター
でアナウンスする。
沖縄側に事務局を置いてほしい 松田さん。

3) 会計監査 保坂・秦に依頼する。

4) その他 中野を会長指名枠で評議員に指名した。

日本サンゴ礁学会 第4回大会のご案内

日本サンゴ礁学会第4回大会を2001年11月2～4日に琉球大学を主会場として開催いたします。皆様の発表申し込みをお待ちしています。

大会実行委員長 松田 伸也

期日：2001年11月2日（金）～11月4日（日）
会場：琉球大学千原キャンパス
（詳細案内図は次号ニュースレター11号 10月上旬発行予定）に掲載します。

スケジュール

11月1日（木）
評議員会・国際サンゴ礁シンポジウム組織委員会
11月2日（金）
10：00～12：00 総会
13：00～17：20 一般発表
11月3日（土）
9：30～12：30 一般発表
14：00～16：30 公開シンポジウム
18：00～20：00 懇親会
11月4日（日）
9：30～12：10 一般発表
13：20～17：00 一般発表

なお、大会関連の最新情報は、学会 Home Page
< <http://www.soc.nii.ac.jp/jcrs> > に掲載しますので、御確認ください。

日本サンゴ礁学会第4回大会の参加・発表申込要領

期日：2001年11月2日（金）～11月4日（日）
会場：琉球大学千原キャンパス
参加登録料：一般5000円、学生2500円、懇親会費5000円
（郵便振替口座への振り込みは、10月1日までお願いします。）
大会発表申し込み締め切り：9月12日（水）
予稿集原稿締め切り：10月3日（水）
大会発表申し込み先・予稿集原稿送付先：山城秀之
〒905-8585 沖縄県名護市字為又 1220-1
名桜大学国際学部観光産業学科
Tel：0980-51-1086 Fax：0980-51-1239
E-mail：yamashiro@tor.meio-u.ac.jp

学会メーリングリストに登録されておられる方にはe-mailで御案内をさしあげておりますが、そうでない方も、参加・発表申込み等の連絡はなるべくe-mailで、山城秀之あてにお申し込み下さい。e-mailを御使用にならない方は、Faxまたは、官製はがきでお願いいたします。

日本サンゴ礁学会第4回大会の参加申込み

参加者名簿作成のため、e-mail、Faxまたは、官製はがきで下記の事項を明記して、10月3日までにお申し込み下さい（はがきの場合、10月3日必着）。

参加者氏名・所属（学生の方はそう記して下さい）
参加者連絡先：（勤務先・自宅）住所、電話番号、Fax
参加内容：大会のみ・発表・懇親会（参加・不参加）
参加費支払い方法：郵便振替（10月1日締め切り）
当日払い（どちらかを選択して下さい。）大会当日は受付が混雑する可能性があります。なるべく郵便振替をお願いします。

===== 参加費の振り込みについて =====

郵便振替口座番号：01780-1-12275

日本サンゴ礁学会第4回大会

振り込み用紙の通信欄には、氏名、所属、金額の内訳（一般・学生、懇親会の参加・不参加）を記して下さい。複数の方がまとめて振り込まれても結構です。

日本サンゴ礁学会第4回大会の発表申込み

発表題目ごとに、e-mail、Faxまたは、官製はがきで下記の事項を明記して、9月12日までにお申し込み下さい（はがきの場合は9月12日のあとに必着）。

発表題目

発表者氏名・所属（発表者に印）

発表内容の概略（100字程度）

発表形態：口頭発表とポスター発表のいずれかを選択して下さい。必要機材（OHP、35mmスライド映写機、液晶プロジェクターなど）。

今回もポスター発表を充実させ、口頭発表は1会場とする予定です。このため、ポスター発表にプレゼンテーション賞を設定する予定ですので、奮ってポスター発表でお申し込み下さい。

日本サンゴ礁学会第4回大会予稿集原稿作成要項

予稿集の原稿は、10月3日（必着）までに、郵送して下さい。なお、発表申込み後に、発表題目や発表者に変更がある場合、訂正内容をe-mailでお知らせ下さい。

用紙サイズ：A4版、必ず上下3cm、左右2.5cmあけること。

書式：タイトル15point程度、氏名・所属10.5point程度、本文10.5point程度（40字×40行＝1600字程度）

その他：図表・写真等は適宜張り込んで下さい。

準備中の公開シンポジウムについて

「サンゴ礁の島に暮らす - 21世紀に私たちはどのようにサンゴ礁と向き合いたいのか? -」

私たちは、21世紀に多くの地球規模での環境問題と取り組まなければなりません。一見、広範で複雑な問題に思えても、その根底には個人や地域からアプローチしなければならない要素が沢山あります。沖縄のサンゴ礁から出来ることは何か? 21世紀にふさわしい、よりポジティブな展開を求めて、今大会では、多くのみなさんと意見交換が出来る場を提供したいと思います。

会場：那覇市内を予定

お知らせ

INFORMATION

日本サンゴ礁学会 ホームページからのお知らせ

■ 学会HP作成委員 ■

山野博哉（国立環境研究所）、
野崎 健・加藤 健（産業技術総合研究所）

IBURL : <http://wwwsoc.nacsis.ac.jp/jcrs>
新URL : <http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs>

現在、サンゴ礁学会HPでは、会員の皆様のページへの
リンク集を作成中です。リンクご希望の方は、
JCRS-hp@sys.eps.s.u-tokyo.ac.jp
あてお知らせ下さい。

リンク集のURLは以下の通りです。
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/links.html>

日本サンゴ礁学会では、ホームページにより広く皆
様に情報発信をおこなっています。URL は以下の通り
です。サンゴ礁学会ホームページを置いている国立情
報学研究所の WWW サーバが変更され、それにともな
ってサンゴ礁学会 HP の URL も変更されますので、お
手数ですがリンクなどの URL 変更をお願いいたしま
す。今年 10 月までは新旧どちらの URL でもアクセス
できますが、11 月以降は新 URL のみとなります。

sango MLからのお知らせ

現在、日本サンゴ礁学会メイリングリスト
[sango] には226名の学会員に登録いただいております。
卒業・移転などによるメールアドレス変更はお
早めにしていただけますようお願いいたします。
変更方法はリスト登録時の Welcome to sango メー
ルに記載されています。

本MLは、管理者で登録を行った後のメールアドレス
の変更は、各自をお願いしています。メールアドレス
の変更がおこなわれないと、管理者にすべて戻って
きてしまい、アドレスからはどなたのものか不明な場
合が多く、管理者の方でアドレスを削除せざるを得ま
せん。

下記のアドレスへのメールは管理者宛てに毎回戻って
きてしまうので、削除させていただきました。これはア
ドレスの変更があったため、届かなくなったものと思
います。該当される方で再度登録を希望される場合は、
MLリスト管理者

sango-admin@sys.eps.s.u-tokyo.ac.jp まで
ご連絡くださいますよう、よろしくお願いいたします。

naoki_s@sa2.so-net.ne.jp
am99219@cc.tokyo-u-fish.ac.jp
am99203@cc.tokyo-u-fish.ac.jp
k967121@sci.u-ryukyu.ac.jp
katayama@smtp.pri.kyoto-u.ac.jp
ksatsuki@ees.hokudai.ac.jp
takehara@mental-co.com

今後とも本メイリングリストをどうぞ活用下さい。

最近のトピック

① 2004年国際サンゴ礁シンポジウムが沖縄開催決定
本ニュースレターで誘致活動に関してご報告いたしました。
バリでのプレゼンで用いた資料を公開しました。
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/ICRS/presentation.html>

② 評議員選挙終了
新評議員をアップしました。
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/intro/committee.html>

③ 会誌Galaxea発行
第2号の目次をアップしました。
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/publications/galaxea.html>

④ サンゴ礁Q&A作成
サンゴとサンゴ礁に関する質問に専門家が答えました。
また、書籍の紹介もおこなっています。サンゴとサンゴ礁に関し
て疑問・質問がありましたら、ご遠慮なく
JCRS-hp@sys.eps.s.u-tokyo.ac.jpあてお尋ね下さい。
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jcrs/qanda.html>

●● 編集後記 ●●

日本サンゴ礁学会ニュースレターNo.9/10合併号
をお送りいたします。発行が遅れまして、会員の皆
様にご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し
上げます。大変申し訳ございませんでした。今後は
出版体制を整え、発行の遅延のないようにいたしま
す。今後とも本学会と本ニュースレターをどうぞよ
ろしくお願い申し上げます。今回はニュースレター
本号として日本サンゴ礁学会第4回大会のご案内、
2004年第10回国際サンゴ礁シンポジウム沖縄誘致
成功のお知らせ、そして別冊として、昨年10月にイ
ンドネシアのバリでおこなわれた第9回国際サンゴ
礁シンポジウムのご報告をさせていただきます。国
際サンゴ礁シンポジウムは、世界中からサンゴ礁の
研究者が集まって研究発表をおこない議論を交わす
貴重な場です。日本サンゴ礁学会第4回大会の開催
とともに、次の2004年の沖縄開催に向けても頑張
ってゆきたいと思います。次号（No 11）は、8月
末の発行予定で、第4回大会の原稿募集のご案内を
させていただきます。

ニュースレター編集者一同
（野崎 健・波利井佐紀・中井達郎・山野博哉）